第１章　紀州のあけぼのと古代人

衣食住のはじまり

時代区分	
	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和（戦前）時代
	昭和（戦後）・平成時代

最初の住人

今から約１万2,000年前までを　旧石器時代といいます。和歌山県で一番古い遺跡は，約３万年前のもので，人々が使ったナイフ形石器が見つかっています。このころは，まだ土器はつくられていません。この石器は，槍の先などとして使われたもので，割るとするどい縁ができるサヌカイト（讃岐石）のような硬い石でつくられていました。この時代の終わりごろには，ナイフ形石器にかわって細石器がつくられるようになりました。細石器は，小さなもので，木や骨などを軸としていくつも並べてはめ込み，槍やナイフとして使っていました。

ナイフ形石器
（紀の川市貴志川町平池遺跡　個人蔵）

約７万年前にはじまった最後の氷河期は，約２万年前から約１万8,000年前ごろが一番寒かったといわれ，和歌山県でも気候が北海道南部から青森県あたりのような気候だったと考えられています。人々は，槍，落とし穴，わななどを使って，ナウマンゾウ・オオツノジカ・ニホンジカ・サル・オオカミ・キツネ・タヌキ・ウサギなどをとって食べていました。そのころは，陸であったと考えられる和歌山市加太沖の海底からナウマンゾウの骨や歯が見つかっています。

縄文土器　深鉢
（串本町大水崎遺跡　串本町教育委員会蔵）

土器がつくられた

初めて土器がつくられた約１万2,000年前から約2,400年前までを　縄文時代といいます。この時代の初めごろに使われた有舌尖頭器[*1]とよばれる石器が県内の各地から発見されています。縄文人は，日当たりがよく，飲み水が近くにある丘の上や大きな川の岸に数家族でむらをつくって住んでいました。住まいは竪穴住居で，東日本ではたくさん発見されるのですが，西日本ではあまり見つかっていません。地面を掘り凹めない平地住居が多かったのかも知れません。このほか，掘立柱建物や大形たて穴住居もありました。和歌山県では，みなべ町徳蔵地区遺跡から17軒[*2]の竪穴住居跡が，かつらぎ町中飯降遺跡[*3]から西日本では珍しい大形竪穴住居跡（普通のものの約５倍の広さ）が発見されています。

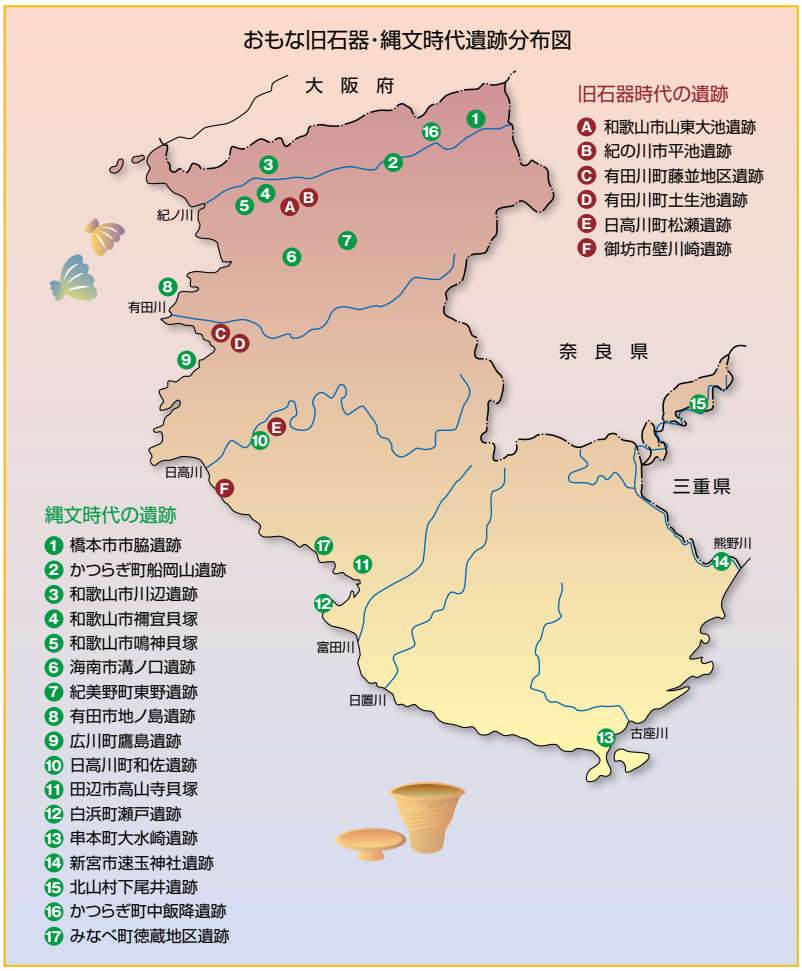
この時代は，大人になるまでに死ぬ子どもが多く，平均寿命は20歳以下でした。墓から見つかった骨をくわしく調べると，きびしい生活のためか骨折や関節炎が多く，虫歯にもなやまされていたこともわかりました。しかし，他人の介護がなければ生きていけないような重い障害をもった人を葬った墓も見つかっており，体の弱い人も長生きできるよう，みんなで助け合っていたこともわかりました。この時代の後半には，男の子も女の子も12～13歳になると，大人になったしるしに上の顎の犬歯（糸切り歯）を両方と

＊１　投げ槍の矢などに使われたと考えられる。
＊２　地面を掘り凹めないで柱を立てたテントのような建物。
＊３　ムラの集会所だったとする考えもある。

も抜きました。また，結婚や家族が死んだときも歯を抜いたようです。人が死ぬと地面に穴を掘って埋めました。和歌山市鳴神貝塚からは男女の骨８体が見つかっています。

着物は，からむし（苧麻）やくずの茎などの繊維を編んだもので，現在のような布はありませんでした。寒い時期には動物の毛皮なども使われていたと考えられます。＊1

縄文人の一番大切な食べ物は，一度にたくさんとれて長い間保存できるクリやクルミ，ドングリ類（トチ，クヌギ，カシなど）で，川の近くにいくつもの穴を掘り，秋に集めたドングリを保存していました。ドングリは，灰汁を抜き，粉にして肉や卵をまぜ，ハンバーグのようにして石のフライパンの上で焼いて食べました。



むらの跡からは，浅鉢・深鉢・皿・注口などの縄文土器，かずらであんだ籠，漆塗りのボウル，狩りに使う丸木弓，矢のさきにつける石鏃，木を切ったり削ったりする石斧，穴をあける石錐，ドングリを粉にする石皿と磨石，魚をとる網のおもりである石錘などの石器，ひすいの玉・イヤリング・漆塗りの櫛などの装身具，祭りで使う琴・石棒・土偶などが見つかっています。

高山寺貝塚の断面
（田辺市教育委員会蔵）

貝塚はタイムカプセル

貝塚は，縄文人がいろんなごみを捨てたところで，食べた貝の殻，魚や動物の骨，骨や石でつくった道具，こわれた土器などがたくさん見つかり，まるでタイムカプセルです。貝殻がたくさんあるため，ふつうでは腐ってしまう骨などがよく残り，縄文人の生活のようすがよくわかります。県内には，和歌山市禰宜貝塚・吉礼貝塚・鳴神貝塚・岡崎遺跡・秋葉山貝塚，有田市地ノ島遺跡，田辺市高山寺貝塚，白浜町瀬戸遺跡などの貝塚があります。高山寺貝塚からは，ネズミ・クマ・タヌキ・イノシシ・シカ・イルカ・ヘビ・カエル・鳥などの骨，タイ・ヒラメ・スズキ・ブリ・ボラ・サメなどの骨，サザエ・アカニシ・ハイガイ・サルボウ・カキ・ハマグリ・シジミなどの殻が見つかっており，いろいろな動物や貝などをとって食べていたことがわかります。

＊1　麻の一種で茎の皮をはぎ，繊維をつくった。

第１章 紀州のあけぼのと古代人

米づくりのはじまり

時代区分	
	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和（戦前）時代
	昭和（戦後）・平成時代

米づくりのはじまりと農具

約2,400年前から約1,800年前までの約600年間を　弥生時代といいます。米づくりは，縄文時代の終わりごろ朝鮮半島から北九州地方に伝わり，しだいに東へ広がっていきました。狩猟や採集にたよっていた時代とちがい，米づくりによって食べ物を自分たちでつくりだすことができ，安定した生活がおくれるようになりました。

初めのころの農具は，鉄を使わずすべて木でつくられており，和歌山市太田黒田遺跡，海南市岡村遺跡，御坊市小松原遺跡，堅田遺跡などから，鋤・鍬・竪杵などが見つかっています。また，石でつくられた石包丁も使われています。この時代の終わりごろになると，鋤・鍬・鎌・鏃などに鉄の刃がつけられるようになり，鉄の普及とともに石でつくった道具は使われなくなりました。

木製 鋤（海南市岡村遺跡　和歌山県教育委員会蔵）

弥生人のくらし

水田に近くてあまり　洪水の心配のない少し高いところにむらをつくりました。むらは，外から敵が入ってこないようにまわりを環濠[*1]や木の柵で囲み，ところどころに門や望楼[*2]を設けていました。門のなかには，竪穴住居やとれた米を保存する高床倉庫がいくつも建てられており，このあたりをおさめる豪族（指導者）の特別に大きな家や祭りをする建物（神殿）などもありました。水田や墓は環濠の外側につくられました。和歌山市太田黒田遺跡，有田川町田殿尾中遺跡，御坊市堅田遺跡などは，このような環濠集落の跡です。むらの跡からは，壷・甕・高杯・鉢・甑などの弥生土器，石剣・石鏃・鉄鏃などの武器，木を加工する石斧，鋤・鍬・杵・石包丁などの農具，石皿・磨石などの食べ物を加工する道具が見つかっています。

弥生土器　甕
（和歌山市太田黒田遺跡　紀伊風土記の丘蔵）

着物は，からむし，麻，絹などの繊維で織った布でつくられました。一番簡単なものは，布の真ん中に頭を通す穴をあけ，両脇をぬい合わせただけの貫頭衣とよばれるもの

＊１　むらをとりまく濠のこと。
＊２　高い見はり台のこと。

でした。

人が死ぬと，縄文時代と同じように地面に穴をほって埋めましたが，方形周溝墓[*1]や墳丘墓[*2]のような特別な墓に埋められる人もあらわれます。なかでも墳丘墓は，100mを超える大きいものものもあります。和歌山県では，方形周溝墓が橋本市柏原遺跡からまとまって16基ほど見つかっています。

石包丁（かつらぎ町船岡山遺跡　和歌山県教育委員会蔵）

銅　鐸

銅鐸は，祭りのときに使われる楽器で，つりさげて揺らすことにより，内部にぶらさげた舌と身がふれて音が出ます。和歌山県では，約30個ほど見つかっています。むらや墓地とはなれた丘の斜面で見つかることが多く，御坊市亀山や日高町荊木では２～３個がまとまって埋められていました。この時代の終わりごろには，つりさげられないほど大きくて重い銅鐸があらわれます。銅鐸は，小さなものから大きなものへ，「聴く銅鐸」から「見る銅鐸」へとかわっていったようです。日高郡や西牟婁郡から見つかった銅鐸のなかには，高さが１mをこえる大型の「見る銅鐸」があり，この時期の銅鐸の多いことが，この地域の特色となっています。

銅鐸（みなべ町雨乞山遺跡　東京国立博物館蔵）

争いがはじまった

水田をつくり，水をひき，米をつくるためには大勢の人々の協力がなければできません。そこで，米づくりや祭りを行うために，むらびとをまとめて指導する人があらわれ，だんだんと力をつけてむらを支配する豪族になっていきました。どんどん水田を広げていくと，土地や水をめぐりむらの間に争いがおこるようになりました。この争いは，話し合いで解決することもありましたが，戦いになることもありました。そのため，弥生時代になるとむらは，そのまわりを環濠や柵で囲む必要があったのです。たくさんの米をたくわえた勢力の強い豪族が，力の弱い豪族を支配するようになり，むらがいくつかあつまって小さなくに（国）が生まれてきました。そして，これらのくにぐにをおさめる卑弥呼のような女王も生まれてきました。

和歌山県でも，この時代の終わりごろになると，和歌山市橘谷遺跡，海南市滝ケ峯遺跡，有田市星尾遺跡のように，水田から離れた高い山の上に移されたむらがあります。このようなむらは，戦いに備えて敵から身を守るためにつくられたもので，高地性集落とよばれており，このころ激しい戦いがあったことがわかります。

＊１　四角形に溝をめぐらし，その内側に溝の土を盛り上げた墓のこと。
＊２　四角形や楕円形や前方後円形に土を盛り上げた墓のこと。

第１章 紀州のあけぼのと古代人

古墳文化のひろがり

時代区分	
	旧石器･縄文･弥生時代
	古墳時代
	飛鳥･奈良･平安時代
	鎌倉･室町時代
	戦国･安土桃山時代
	江戸時代
	明治･大正･昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)･平成時代

秋月古墳と下里古墳

３世紀の中ごろ，畿内[*1]で初めて古墳がつくられました。これが古墳時代のはじまりです。

和歌山県で初めてつくられた古墳は，和歌山市の秋月古墳です。この古墳は４世紀の初めにつくられましたが，その後ほとんどがけずりとられたため，死者がおさめられているところは残っていませんでした。周りに弥生時代にもつくられていた方形周溝墓５基が見つかっています。つづいてつくられたのが那智勝浦町下里古墳で，海岸の砂丘の上につくられています。全長約60mの前方後円墳で，周りに濠があります。後円部に細長い竪穴式石室があり，きれいな石でつくった杖の一部や管玉などが見つかっています。

古墳文化の広がり

４世紀の終わりから５世紀の初めごろ，和歌山市晒山１号墳，岩橋千塚古墳群花山８号墳･花山10号墳，御坊市岩内３号墳，上富田町山王１・２号墳などがつくられます。この時期には，紀ノ川流域から富田川流域まで，古墳文化が広がっています。ただ，これらの古墳のなかには，１人の人の墓というよりも家族の墓としてつくられたものがあり，１つの古墳に何人も葬られていることがあります。

５世紀の中ごろから終わりにかけてのころ，和歌山市では，紀ノ川の北側の地域で，車駕乃古址古墳・釜山古墳・大谷古墳などの大型の古墳がつくられています。また，紀の川市丸山古墳や橋本市陵山古墳は，大型の円墳で，丸山古墳には組合式石棺，陵山古墳には和歌山県で一番古い横穴式石室がありました。和歌山市岩橋千塚古墳群大谷山39号墳・寺内63号墳・前山Ａ17号墳・八王子山８号墳，海南市山崎山５号墳・山崎山８－Ⅱ号墳，有田市椒古墳，御坊市阪東丘１・２号墳，日高町中の谷古墳，みなべ町城山古墳，白浜町脇ノ谷古墳・権現平１号墳などもこのころの古墳です。

大谷古墳と椒古墳

和歌山市大谷にある大谷古墳は，全国的に有名な古墳です。全長70mの前方後円墳で，５世紀終わりごろにつくられたものですが，後円部に家形石棺があり，その中から人の冑や甲，刀，剣，鏃，金や銀で作った耳飾り，小さな鏡，銀とガラス玉の飾り，銅に金や銀のめっきをした帯の飾り，鈴，勾玉，管玉，臼玉などが見つかりました。また，石棺の周りから，矛，鍬，鎌，手斧，刀子，のみ，馬の冑，馬の甲，鞍，鐙などが見つかっています。

有田市にある椒古墳は，大谷古墳とほぼ同じころにつくられており，周濠をもつ帆立貝式の前方後円墳[*2]ですが，今は直径約20mの後円部だけしか残っていません。後円部には横穴式石室があり，和歌山県では古い方の横穴式石室です。玄室の奥にあった石棺から石の枕，銅の鏡，銅に金めっきをした帯の飾り，管玉，刀などが，玄室から蒙古鉢形冑，甲，槍，鏃，刀，斧，土器などが見つかっています。[*3]

＊１　奈良県，大阪府，京都府と兵庫県の一部。
＊２　墳丘をとりまく濠のこと。
＊３　死者をおさめる部屋のこと。

馬冑（和歌山市大谷古墳　文化庁保管）

馬の冑や甲や蒙古鉢形冑はたいへん珍しいもので，いずれも朝鮮半島との強いつながりを示すものです。馬の冑は国内から２点，朝鮮半島から10点ほど見つかっており，朝鮮半島北部から中国東北地方にかけての地域（高句麗という国があった）の古墳に，馬の冑や甲をつけた馬の壁画がよく見られます。このことから，これらの古墳におさめられた豪族は，朝鮮半島へ出かけたことのある人かも知れません。

岩橋千塚古墳群

和歌山市の岩橋千塚古墳群には，約670基（うち前方後円墳28基）の古墳があるといわれており，全国でも最大クラスの古墳群として特別史跡に指定され，その一部に史跡公園「紀伊風土記の丘」があります。ほとんどの古墳が５世紀の終わりごろから７世紀の初めごろまでの約100年間につくられています。このころ，古墳を低い山の上につくるようになり，紀ノ川の南側に住んでいた豪族たちがこのあたりの山を共同の墓地としたのでしょう。

以前は，その地域で一番力のある豪族だけしか古墳をつくれませんでしたが，岩橋千塚古墳群がつくられるころになると，もっとたくさんの人々が古墳をつくれるようになり，横穴式石室がつくられました。このような古墳群を特に群集墳とよんでいます。６世紀後半には，和歌山市から白浜町までの海岸に沿った地域や紀ノ川の流域で，いくつもの群集墳がつくられていました。

岩橋千塚古墳群　小さく盛り上がって見える１つ１つが古墳
（学生社刊『古墳の航空大観』より転載）

特色のある横穴式石室と石棚・石梁

横穴式石室は，石を積み上げた玄室に，羨道部[*1]をとりつけたもので，羨道部と玄室の入口を扉石（大きな板のような石）でふさいでいます。この扉石を開ければ，何度も埋葬に使うことができます。岩橋千塚古墳群の横穴式石室は，羨道部⇒通廊部（玄室前道）⇒玄室からできており，通廊部は羨道よりもせまく低くなっています。このような通廊部がある形の石室を特に「岩橋型の石室」とよぶことがあります。

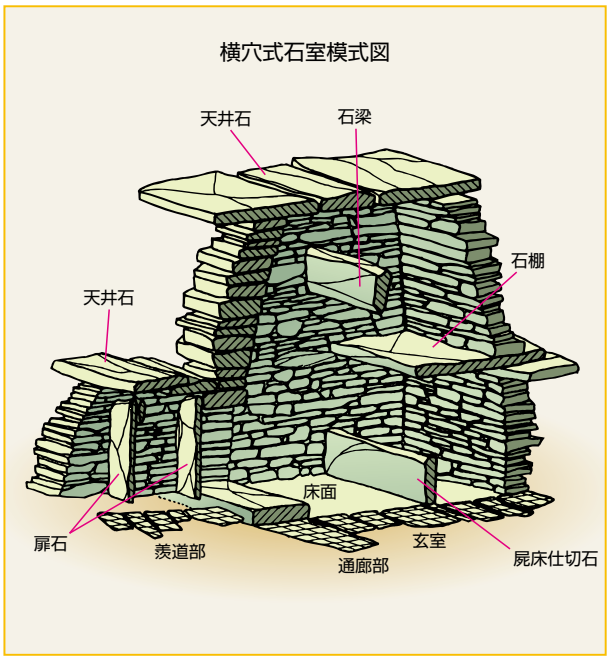
この石室のもう１つの特徴は，玄室に石棚・石梁を設けたものが多いことです。和歌山県には，石棚がある古墳は52基，石梁がある古墳は23基あります。石梁がある古墳のうち21基には石棚もあります。これらの古墳は，和歌山市を中心に，東は紀の川市まで，南は有田川の北岸まで見つかっていますが，一番数が多いのは岩橋千塚古墳群です。石棚・石梁は，初め石室がくずれないように強くするために設けられたものと考えられますが，のちには飾りとして設けられたものもあるようです。石棚がある古墳は，全国的にみると福井県から熊本県までの地域に約130基あります。一方，石梁は県内でも和歌山市と海南市に

＊１　玄室へ入るための廊下のこと。

岩橋千塚古墳群前山A46号墳の
玄室内部
（上に石梁，下に石棚が見られる）

しかありません。

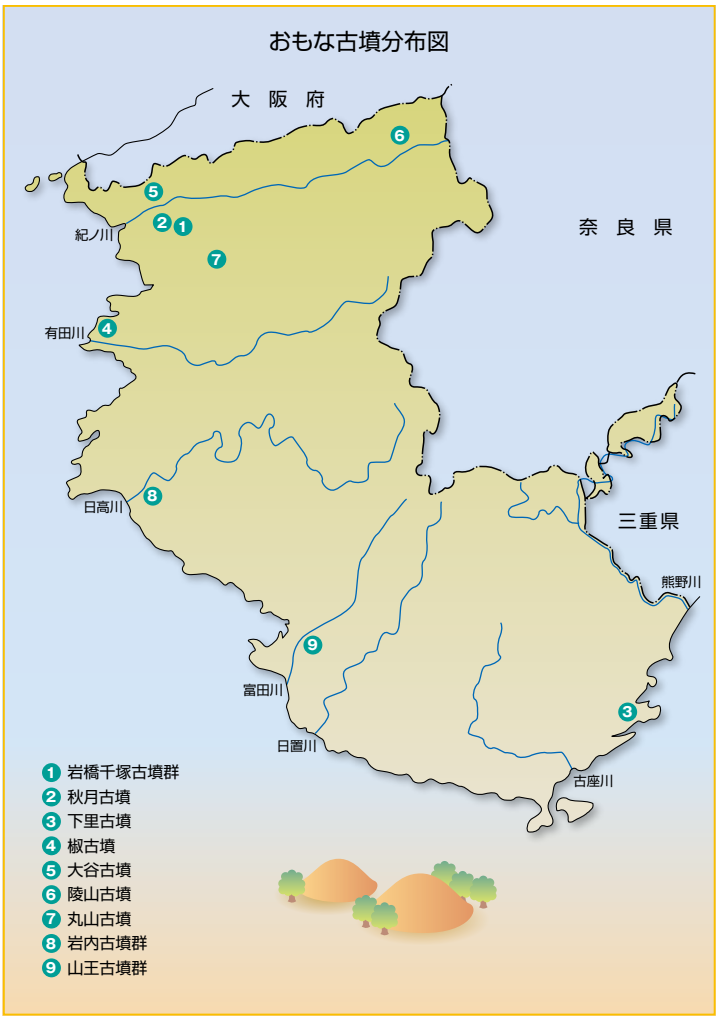
2003（平成15）年から石棚・石梁をもつ最も古い古墳の一つである大日山35号墳の発掘調査と環境整備が行われ，和歌山県で最大の前方後円墳であることがわかりました。その東西の造出しから家・馬・鳥・人物・器財などの埴輪がたくさん発見されています。なかでも，前後に顔のある人物・飛んでいる鳥・矢を入れる胡録などの埴輪は全国的に見てもたいへん珍しいものです。また，同じ頃に作られた継体天皇陵古墳の埴輪と似たところがあるといわれています。



古墳の分布の特徴

和歌山県の古墳総数は約1,600基で，周辺の府県に比べてたいへん少ないです。その分布を見ると和歌山市から白浜町までの海岸線に沿った地域には，ほとんど古墳がありますが，すさみ町から新宮市までの地域には，２基しかありません。また，紀ノ川に沿った地域や有田川中流域には見られますが，それ以外の山間部からは発見されていません。古墳がいちばん多いのは紀ノ川平野を中心とする地域で，約1,000基，つづいて御坊市を中心とする地域で約160基あります。たくさんの古墳を作れるということは，多くの人々を支配する力をもった豪族がいたことを示しており，紀ノ川平野の豪族達が他とかけ離れた力をもっていたといえましょう。

このように，約350年にわたって古墳がつくられますが，７世紀の中ごろにはほとんどつくられなくなります。そして，豪族たちは氏寺の建立に力を注ぐようになりました。＊1



＊1　自分の家の寺のこと。

わかやまの知識 コラム

【人物画象鏡】

人物画象鏡（隅田八幡神社蔵）

橋本市の隅田八幡神社に昔からつたえられてきた鏡で，どこから見つかったかわかりません。日本でようやく漢字を使いはじめたころの貴重な資料で，国宝に指定されており，今は東京国立博物館に保管されています。

この鏡は，円形で，直径が19.8cm，青銅（銅とすずの合金）でできています。中国でつくられた鏡をまねて日本でつくられたものです。ものをうつす面は，文様がある面の裏側です。この鏡のもとになったのは，神人歌舞鏡という，仙人と人間が歌い踊っているところをあらわした鏡です。真ん中の鈕（ひもを通す穴のあるところ）を中心に，放射状に仙人やいろいろな姿の人間があらわされています。

鏡のふちに沿ってぐるっと一周するように，「癸未年八月日十大王年男弟王在意柴沙加宮時斯麻念長寿遣開中費直穢人今州利二人等取白上同二百旱作此竟」という48個の漢字が刻まれています。この文章の読み方についてはいろいろな説がありますが，だいたいの意味は，「癸未年，男弟王が意柴沙加宮におられたとき，斯麻という人が長寿を祈って，穢人と今州利の二人に命じて，銅200旱を使ってこの鏡をつくらせた」と考えられています。この鏡がつくられた「癸未年」は，60年ごとに巡ってくる年で，西暦443年，503年，563年のいずれかにあたるとされています。

銅の鏡のつくり方は，石または砂で笵[*1]をつくり，そこへどろどろにとけた銅を流しこんでつくります。笵に刻んだ文字や文様はすべて裏返しになるので，笵には裏返しの文字や文様を書いておきます。しかし，この鏡の文字や文様の多くが裏返しになっており，これをつくった人は，あまり鏡をつくった経験がなかったのかもしれません。

わかやまの知識 コラム

【鳴滝遺跡の巨大倉庫群】

発掘現場

和歌山市鳴滝で，高校を建設するためにその用地を発掘調査したところ，今から約1,600年前の古墳時代につくられた建物の跡がたくさん見つかりました。建物は棟持ち柱のある高床構造で，倉庫と考えられますが，ここで見つかったのは床面積が50～80㎡あり，当時の倉庫のなかでは桁外れに大きいものでした。このような巨大な倉庫が屋根の向きをそろえ，西側に５棟，東側に２棟が整然と並んで建てられていました。いったい何が納められていたのかはわかりませんが，この倉庫群は古墳時代の紀伊を支配していた豪族である紀氏がつくったものと考えられます。倉庫群は，長く使われることなく取り壊されていますが，柱を抜き取った跡からたくさんの須恵器[*2]とよばれる土器のかけらが見つかりました。この土器は，今の朝鮮半島南部の伽耶とよばれた地方独特の形をしており，日本では非常に珍しいものです。紀氏が朝鮮半島の文化を取り入れるほど活躍していた豪族であることをものがたるものといえるでしょう。

＊１　金属を流しこむ型のこと。
＊２　高温で焼き上げられたねずみ色の堅い素焼きの土器のこと。

第１章 紀州のあけぼのと古代人

律令制と紀伊国

時代区分
旧石器・縄文・弥生時代
古墳時代
飛鳥・奈良・平安時代
鎌倉・室町時代
戦国・安土桃山時代
江戸時代
明治・大正・昭和（戦前）時代
昭和（戦後）・平成時代

国府と南海道

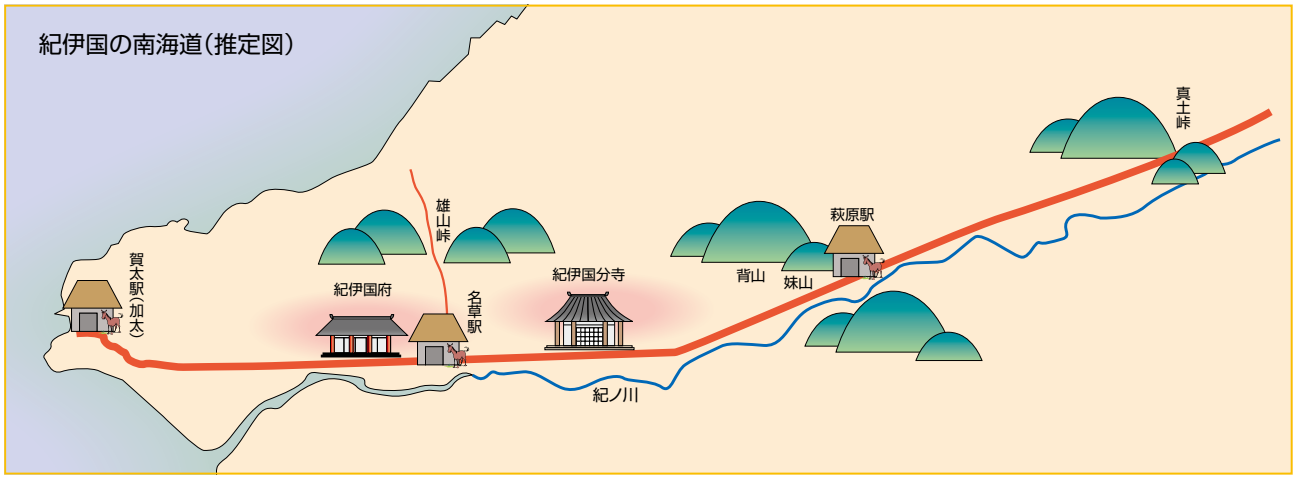
奈良時代には，奈良に　平城京という都がおかれ，天皇を中心にして，全国を支配するしくみ（律令制）ができあがりました。全国は60あまりの国に区分けされ，朝廷から派遣された国司という役人たちは，それぞれの国を数人でおさめることになりました。また国司は，国府という役所で仕事をしていました。都と全国の国府は，７本の大きな道で結ばれ，都と連絡をとったり，都へ税をおさめたりすることに使われていました。

現在の和歌山県は，紀伊国という国に含まれ，その中は伊都・那賀・名草・海部・安諦（在田）・日高・牟婁という７つの郡に分けられていました。一部，これらの郡の名前は現在でも使われています。紀伊国の国府の建物の跡は見つかっていませんが，現在の和歌山市府中のあたりにあったのではないかと考えられています。また，７つの郡にはそれぞれ郡の役所がおかれ，その土地に住む豪族が郡司として支配していました。日高郡の役所のあとは，御坊市財部で発見され，調査が行われました。

都につながる南海道という大きな道は，道はばが10mもあり，紀ノ川の北にそって造られ，さらにその道すじは現在の和歌山市加太から船で淡路国（兵庫県の淡路島）にわたり，四国につながっていました。南海道の途中には，萩原駅（かつらぎ町萩原）・名草駅（和歌山市山口）・賀太駅（和歌山市加太）がおかれ，役人が旅行するために使う食料や馬・船などを用意していました。

紀伊国分寺跡発掘のようす（紀の川市）

奈良時代の中ごろには，社会の不安をしずめるために，聖武天皇が平城京に東大寺をつくらせ，またそれぞれの国には国分寺と国分尼寺を建てることを命じました。紀伊国の国分尼寺について



ははっきりとわかりませんが，国分寺は現在の紀の川市東国分に建物のあとが残っており，発掘調査が行われました。

農民と税

そのころの農民は，さまざまな税をおさめなければならないことが法律で決められていました。６歳以上の農民は，一定の広さの田んぼ（口分田）が貸し与えられ，取れた稲の３％ほどを国府におさめることになっていました。また，大人の男の人は，工事で働かされたり，兵士として都や九州・東北地方に行ったり，地方の特産物を税として朝廷に納めなければなりませんでした。

木簡（平城京跡出土　奈良文化財研究所蔵）

農民に貸し与えられた田んぼは，７世紀の中ごろまでに，その形や大きさが整えられました。航空写真を見ると，現在も和歌山県内の平野では，そのころに整えられた条里制とよばれる田んぼの形が残されている場所が見られます。

それぞれの国から朝廷に納められる特産物は，当番の農民たちが都に運ぶことになっていて，その荷物につけられていた木の荷札（木簡）が，奈良県の平城京の跡などから見つかっています。木簡には，税をおさめた人の住所・名前や特産物の種類などが書かれています。このような木簡を調べると，紀伊国の特産物は塩や魚・貝・海藻など，海でとれるものが多かったことがわかります。また，漢字が少しちがう場合もありますが，「指理」（かつらぎ町）・「可太」（和歌山市）・「浜中」（海南市）・「吉備」（有田川町）・「財」（御坊市）・「南部」（みなべ町）など，今でも使われている地名が書かれた木簡が発見されています。

わかやまの知識 コラム

【三彩壺】

三彩壺（京都国立博物館蔵）

この写真のつぼは，1963（昭和38）年に橋本市高野口町名古曽の柿畑の中から発見され，現在は京都国立博物館におさめられています。中国，唐の文化にならって，奈良時代に日本で作られたもので，高さ22.5cmのつぼの中には，男の人の骨がおさめられていました。これは，なくなった人を火葬したあと，その骨を入れたふた付きの骨つぼで，近くにあった寺（名古曽廃寺）と関係のある人物をほうむったものではないかと考えられています。

紀伊国では，有力な豪族によって，７世紀の終わりごろから各地に寺が造られるようになり，和歌山県内には，そのころの寺の建物の土台に使われた石や，屋根のかわらが見つかった場所が10か所以上もあります。その中でも，道成寺（日高川町）は現在まで続いているただ一つの寺です。

また，紀伊国で生まれ，奈良の薬師寺で活躍した僧の景戒は，平安時代の初めに仏教の教えを物語でわかりやすく説明した『日本霊異記』をつくりました。その中には，奈良時代終わりごろの紀伊国各地の物語がたくさんおさめられています。ちなみに，このころ紀三井寺（和歌山市）や粉河寺（紀の川市）が開かれたと伝えられています。

第１章 紀州のあけぼのと古代人

万葉集と紀伊国

時代区分
旧石器・縄文・弥生時代
古墳時代
飛鳥・奈良・平安時代
鎌倉・室町時代
戦国・安土桃山時代
江戸時代
明治・大正・昭和（戦前）時代
昭和（戦後）・平成時代

紀伊国への旅

奈良時代の中ごろにまとめられた『万葉集』には，天皇・貴族・農民などの歌が4,500首以上もおさめられています。そのうち，紀伊国に関係のある歌は130首もあります。これらは，ほとんどが７世紀の中ごろから８世紀の中ごろにかけて，飛鳥や奈良の都から紀伊国をおとずれた天皇とそのお供をした貴族たちがよんだ歌です。

このように天皇が紀伊国を訪れたのは，和歌山平野を中心として古墳時代から強い勢力を持っていた豪族，紀氏を従わせるため，または都に住んでいた天皇・貴族たちが，暖かく海の風景がある紀伊国にあこがれていたためであると考えられています。天皇・貴族たちが目指したのは，「牟婁の湯」とよばれた白浜温泉や，美しい風景で有名であった和歌浦でした。人々は，都から紀ノ川に沿って南海道を通り，和歌山平野に着いたあとは，船にも乗りながら海岸沿いに南の白浜温泉へ向かっていたようです。

歌がよまれたのは，その旅の途中で美しい風景が人々の心に残った，真土山（橋本市），妹山と背山（かつらぎ町），和歌浦と玉津島（和歌山市），黒牛潟と藤白坂（海南市），糸我峠（有田市），白崎・由良の崎（由良町），岩代（みなべ町），出立（田辺市）などの場所です。このほか，白浜温泉への道すじとは別に，三輪崎・佐野（新宮市）をよんだ歌もあります。

妹山と背山（かつらぎ町）

紀伊国でよまれた歌

それでは，紀伊国でよまれた有名な歌を，ここで３　首紹介します。

人ならば母の愛子ぞあさもよし　紀の川の辺の妹と背の山

（人にたとえると，母の最も愛するふたりの子どものようだ，紀ノ川の川辺にある妹山と背の山は）

『万葉集』には，妹山と背山をよんだ歌が14首おさめられています。二つの山がならぶ様子は，都の近くから見える二上山と似ており，それを思い出して，旅人は遠くまでやってきたという思いにふけり，歌をよんだのでしょう。

和歌の浦に潮満ちくれば潟をなみ　芦辺をさして鶴鳴き渡る

（和歌の浦に潮が満ちてくると干潟がなくなるので，芦のはえているあたりをめざして，鶴が飛んでいくよ）

現在とは違い，たくさんの小さな島がうかんでいた和歌浦は，奈良の都の人にとっては風景の美しい場所として有名でした。この歌は，724（神亀元）年に聖武天皇が和歌浦を訪れた時，付き従った山部赤人がよんだ歌のひとつです。

家にあれば笥に盛る飯を草枕　旅にしあれば椎の葉に盛る

（都の家にいると，妻が入れてくれたおわんでご飯が食べられるのに，今はとらわれの身の旅なので，ひとりでシイの葉っぱにもって食べなければならない）

658年11月，斉明天皇に対するむほんの疑いでとらえられた有間皇子が，殺される少し前に岩代の浜でよんだ歌のうちのひとつです。罪人になった自分の身のあわれさが，この歌によみこまれています。

和歌浦（和歌山市）

岩代の松と歌碑（みなべ町）

第１章 紀州のあけぼのと古代人

空海と高野山

時代区分	
	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和（戦前）時代
	昭和（戦後）・平成時代

空海の一生

日本で最も有名な僧の一人である空海（弘法大師）は，774（宝亀５）年に讃岐国（香川県）の豪族の子どもとして生まれ，若いころに都に行って，中国の古い書物などについて勉強しました。やがて僧になり，いろいろな場所で修行を積みます。804（延暦23）年には遣唐使の一行に加えられ，中国，唐の都の長安に行き，恵果という唐の僧から，新しい仏教の教えを学び，たくさんの経典をもって日本に帰りました。[*1]

空海は，嵯峨天皇の助けを受けて真言宗を開きました。816（弘仁７）年には高野山の土地に，京都の東寺[*2]と同じように真言宗の中心となる金剛峯寺をつくることを認められました。空海は832（天長９）年高野山に移り住み，835（承和２）年に亡くなりますが，そのときにはまだ金剛峯寺の建物全部は完成していませんでした。空海の弟子たちの努力によって，９世紀の終わりごろまでにようやく完成したようです。亡くなってから約90年のちに，醍醐天皇から名前をもらい，それから後，弘法大師とよばれるようになりました。

空海は，仏教の教えにくわしいだけでなく，詩をつくったり字を書くことが上手で，中国語を話すこともできました。「弘法にも筆のあやまり」（弘法大師のような書道の名人でも，書きまちがいをすることがあるという意味）ということわざもあります。空海の教えは，のちの日本の仏教に大きな影響をあたえ，また平安時代の中ごろから，人々は空海に対する信仰をもつようになりました。弘法大師についての井戸や温泉にまつわる伝説などが，全国各地に残されています。なかでも，唐から日本に向かって飛ばした三鈷（仏教の道具）の落ちた場所を，空海が探しているときに，白い犬と黒い犬をつれて，猟師の姿をした，高野明神という神に高野山を案内してもらい，高野山を守る女神の丹生明神から土地をゆずってもらったという伝説は有名です。

弘法大師・丹生高野両明神画像（部分）（鎌倉時代　高野山金剛峰寺蔵）

高野山の発展と根来寺

高野山金剛峯寺は，10世紀の前半になると東寺の支配を受けるようになり，また994（正暦５）

＊１　奈良時代・平安時代初期に唐（中国）に派遣した使節のこと。
＊２　京都市にある真言宗寺院・教王護国寺のこと。

根本大塔（高野山）

年には雷による火事でほとんどのお堂が焼けてしまいました。しかし，11世紀に入ると朝廷で大きな権力をもっていた藤原道長と頼通の助けを受け，ふたたび栄えるようになりました。天皇や貴族たちも，たびたび高野山に登るようになります。また高野山のふもとには，官省符荘[*1]という荘園がもうけられ，金剛峯寺をささえる領地になりました。

12世紀になると，高野山の中では覚鑁という僧が力をもつようになりました。覚鑁は肥前国（佐賀県）の出身で，鳥羽上皇の助けを受けて真言宗を改革しようとしましたが，高野山の中ではこれに反対する僧も多く，はげしい争いがおこりました。覚鑁のグループは，この争いに敗れて高野山から出て行かなければならなくなり，1140（保延６）年には根来（岩出市）に古くからあった寺をもとにして根来寺をつくりました。金剛峯寺と根来寺との争いは，覚鑁がなくなってからも続き，鎌倉時代になると覚鑁の教えを受けついだグループは，ついに高野山から独立して新義真言宗という新しい教えを開くことになりました。

わかやまの知識 コラム

【高野町石】

高野山のふもとの慈尊院から奥の院まで続く約24kmの高野参りの道に，鎌倉時代後期に建てられた石碑があり，高野町石とよばれています。もとは木製の卒塔婆（仏塔）が道しるべとして建てられていましたが，1265（文永２）年に高野山の覚斆という僧侶の呼びかけで，1266年から1285（弘安８）年のほぼ20年間に町石が建てられました。１町（約109m）ごとに町石，36町ごとに里石（１里＝約４km）が建てられ，その総数は221基にのぼりました。のちの時代に建てかえられたものを除いて，現在，当時の町石が179基残っています。

高野町石

町石は，高さ約３m，幅30cmの角柱の花崗岩を五輪塔の形に加工し，細長い部分に町数と寄進した人の名前を刻んでいます。石は，摂津の御影（神戸市）から船で運ばれたと考えられています。寄進した人として，後嵯峨天皇をはじめ朝廷や貴族，鎌倉幕府の北条時宗や有力な武士などがいました。また，僧や貴族の女性のほか，庶民と考えられる人たちの寄進による町石が６基あります。高野の僧の働きかけで信仰した人々がいたことが考えられます。

＊１　太政官と民部省が符とよばれる命令書で特権を認めた荘園のこと。

第１章 紀州のあけぼのと古代人

熊野三山と参詣道

時代区分	
	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和（戦前）時代
	昭和（戦後）・平成時代

熊野三山

紀伊半島の南部一帯を熊野（くまの）といい，和歌山県から奈良（なら）・三重（みえ）県にまたがっています。ここは太平洋に面していますが，山が折りかさなっていて奥深いところです。この熊野の奥地から中心部に流れているのが熊野川です。

熊野川に近いところに３つの大きな神社があります。川の上流部にある田辺（たなべ）市本宮（ほんぐう）町の熊野本宮大社（たいしゃ），川口近くにある新宮市の熊野速玉大社（はやたまたいしゃ），それに，那智（なち）の滝（たき）で知られる那智勝浦町の熊野那智（なち）大社です。

大斎原（おおゆのはら）（もとの本宮の社があったところ）

これらの神社は，最初はそれぞれの場所にある自然の木や岩や滝などにやどる神を祭り，信仰していたとみられますが，奈良時代ごろには，神社としてかたちをととのえるようになりました。平安時代の中ごろを過ぎると，この３つの神社がおたがいに結びつき，また，神は仏が姿を変えてあらわれたのだという考え方が出てきて，その影響を受けました。それを権現（ごんげん）といい，熊野三山（さんざん）とか熊野三所（さんしょ）権現とか呼ばれるようになったのです。

熊野は不便なところであるだけに，はじめは僧（そう）や修験者（しゅげんしゃ）（山伏（やまぶし））が修行（しゅぎょう）してまわる場所でしたが，奥深いところに祭られた熊野の神社が次第に知られて，広く信仰されるようになり，多くの人々が熊野へ参詣（さんけい）にくるようになりました。

熊野速玉大社

熊野参詣道

熊野三山へ参詣するための道には，古くは紀伊国を通る紀伊路（きいじ）と，伊勢（いせ）の方から来る伊勢路がありました。しかし実際は，熊野信仰がもっとさかんであった平安時代後期から鎌倉（かまくら）時代にかけては，京都からの参詣道として，おもに紀伊路が利用されました。

京都から船で淀川（よどがわ）を下り，摂津国（せっつのくに）（大阪市）の窪津（くぼつ）というところから歩

きはじめ，和泉国から雄ノ山峠を越えて紀伊国に入ってきます。紀ノ川を渡り，海南の藤代（白）峠や，有田と日高の郡境の鹿ヶ瀬[*1]を越え，海に近いあたりを南下して，田辺からは中辺路とよばれる山間部の道に入り，いくつもの山坂を上り下りして，熊野本宮に着きます。

熊野三山をめぐるには，まず熊野本宮大社に参り，本宮から船で熊野川を下って，新宮の熊野速玉大社へ，そこから那智へ歩き，熊野那智大社に参ります。京都への帰りは，本宮から中辺路を通り，もと来た道をもどって行きました。

この紀伊路とそれにつづく中辺路の参詣道には，摂津国（大阪市）から熊野まで，大体２kmぐらいの間隔で，「王子」という小さい神社がまつられていて，それに参拝しながら熊野に向かいました。全部で100近くあり，熊野九十九王子とよばれています。

現在，紀伊路・中辺路のうち，田辺市の滝尻王子から那智までの古道は，とくに古い面影が残っていて，世界遺産になっています。

熊野参詣道には，中辺路のほかに，田辺から海岸線近くを通る大辺路，高野山から熊野本宮に通じる小辺路があり，これらは伊勢路とともに，おもに江戸時代に利用されましたが，この道も世界遺産に登録されています。

熊野参詣路とおもな王子跡

上皇・貴族の熊野参詣

熊野へは，皇族・貴族・武士・農民など，いろいろな身分の人々が参詣に来ていますが，特に大がかりな参詣行事は，熊野御幸といわれる上皇方の熊野参詣です。上皇は，天皇が位を退いてからの呼び名で，さらに出家（僧になること）すると，法皇といいます。

熊野那智大社

＊1　第１編　第３章「昔の道と今の道」78ページ参照。

上皇・法皇の熊野参詣は，宇多法皇の907（延喜７）年が最初ですが，盛んになるのは，院政といって上皇が実際の政治を動かし，勢力をふるった時代で，平安時代の終わりごろです。院政をはじめた白河上皇が12回，鳥羽上皇が23回，後白河法皇が34回に及んでおり，次いで鎌倉時代に入って，後鳥羽上皇が承久の乱で隠岐（島根県）へ移されるまでの間に，28回熊野へ参詣に来ています。この４人の上皇で，約130年間に100回近く熊野御幸を行ったことになります。これらの上皇がいかに熱心に熊野を信仰したかを示すのもです。

上皇・法皇の熊野参詣は，一行の人数が多いときには数百人にのぼり，一番多かったのは，白河法皇の1118（元永元）年の御幸で，814人と記録されています。京都からは往復約600kmで，１か月近くかかるのですから，一度の御幸でも大変な行事だったのです。

熊野御幸の道中のようすがうかがえるものに，後鳥羽上皇に従ってきた歌人の藤原定家による，1201（建仁元）年の日記があります。それによると，寒い時にもかかわらず，身を清めるために川や海で水を浴び，どの王子でも神にささげものを供えています。また，後鳥羽上皇は和歌に熱心で，藤代，切目，滝尻などの王子で和歌会を開き，従者の歌人たちが，上皇の出した題で和歌をよみました。各人が和歌を書いたものを熊野懐紙といい，当時の文化史上の貴重な資料とされています。

さまざまな人の熊野参詣

平安時代後期の代表的な歌人である僧の　西行は，何度か熊野へ行き，そのつど和歌をよんでいます。八上王子（上富田町）では，サクラの花の歌を社の垣に書きつけたとして，その光景が『西行物語絵巻』に描かれています。

鎌倉時代の時宗という新しい仏教を始めた一遍は，1274（文永11）年に熊野に参詣し，本宮の社殿にこもって，悟りを開いたといわれ，それから各地をめぐり，多くの人々の心に救いを与えました。熊野三山や道中での様子は，『一遍上人絵伝』という絵巻物で見られます。

上皇や貴族の参詣がさかんなころ，女性の参詣もかなりありましたが，鎌倉幕府を開いた源頼朝の妻で，尼将軍といわれた北条政子も，1208（承元２）年に鎌倉を出発して，京都に入り，それから熊野に参詣しています。10年後にもう一度参詣したことがわかっていますが，どちらも詳しいことは知られていません。

金閣寺を建てた足利義満の妻だった北野と２人の娘が，1427（応永34）年に，実意という修験者の案内で，熊野三山に参詣していることが，実意の日記で知ることができます。北野はそれまでに13回熊野に

わかやまの知識 コラム 【川の参詣道】

熊野参詣で三山を巡拝するさい，本宮から新宮へは熊野川を船でくだり，帰りもここを船でさかのぼるのがふつうでした。江戸時代に大辺路を廻ってきた人も，新宮から本宮へ行くのに，たいてい船を利用しました。

熊野川の本宮・新宮間は40km近くありますが，すぐれた景観をそなえていることで知られ，いまもそのすがたをとどめています。ただ，この間の航行は，悪天候のときなどはたいへん危険でした。新宮からさかのぼるには，船を引いてのぼらねばならず，苦労のいるものでした。

「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録された際，熊野川のこの区間が中辺路に続くものとして，「川の参詣道」として登録されました。川の流路が世界遺産になるのは，きわめて珍しいことです。

参詣していますが，そのころ武家の女性の参詣も珍しくなかったのです。

また，各地の有力な武士も熊野へ参詣するようになりました。

江戸時代になると，それが農民や商人などに及びました。岩手県北部の久慈市の商人であった吉田金右衛門は，1708（宝永５）年に，73歳で８回目の熊野参詣をしたと書かれた記念碑が，新宮の熊野速玉大社の境内に建てられています。そのころから，関東・東北方面などの農民が集団で，伊勢と熊野に参り，さらに西国三十三所の寺々を巡りました。

大門坂（那智勝浦町）

熊野三山は，各地の霊場とは違って，早くから女性や身体障害者などを受け入れていました。一遍のはじめた時宗の教えがさらにそれを広めて，障害や病気をもった人々が，健康な人の助けをかりながら，遠方からも熊野に参詣し，熊野本宮大社と関係の深い湯峰温泉で湯治をしました。

わかやまの知識 コラム

【神さまの島めぐり】

熊野速玉大社の例大祭は，10月15日と16日に行われます。16日が御船祭です。大社第二殿に祀る熊野夫須美神のお祭りで，大社横の熊野川から，約1.5km上流の御船島まで，神霊が赤い神幸船に乗って島を巡ります。それを先導するのが９隻の早船で，勇壮な競漕が行われます。神さまが祀られた由来を演じているのだそうです。

御船島をまわる早船